

1 / 3号機原子炉格納容器の漏洩箇所 の推定 (追加の検討結果)

2023年2月20日



東京電力ホールディングス株式会社

第102回 特定原子力施設監視・評価検討会の資料3-3「1号機原子炉格納容器の漏洩箇所の推定」(東京電力)において、1 / 3号機原子炉格納容器(以降、「PCV」と言う。)の損傷や漏洩量等について報告を実施している。

本資料は、上記報告に対する以下のコメントの下線部について、追加の検討状況を報告するもの。

<コメント内容>

- 1 / 3号機格納容器水位低下に向けた取り組み
- ◆ 1号機PCVについて、ROVによる調査中などを除き水位をなるべく低下させるとともに、損傷個所の特定等のためのROVによる調査を検討すること。また、損傷の程度、漏えい量等について注水量などを踏まえた定量的な評価を検討すること。また、原子炉建屋側への漏えい状況(トリチウム移行量や滞留水の状況等)も踏まえ推定すること。(第99回、102回)
 - ◆ 3号機PCVの水位低下事象について、注水停止試験等も踏まえ、早期に水位を低下させること。その際、より低位置への水位計の設置要否についても検討すること。また、PCV水位低下に関する推定原因等について説明すること(第100回、102回)

<検討内容>

1号機	<ul style="list-style-type: none"> • R/B地下滞留水のトリチウム濃度の変化
3号機	<ul style="list-style-type: none"> • R/B地下滞留水のトリチウム濃度とPCV、S/C内滞留水のトリチウム濃度からの考察 • その結果を踏まえた、漏洩箇所・漏洩面積の評価

1号機

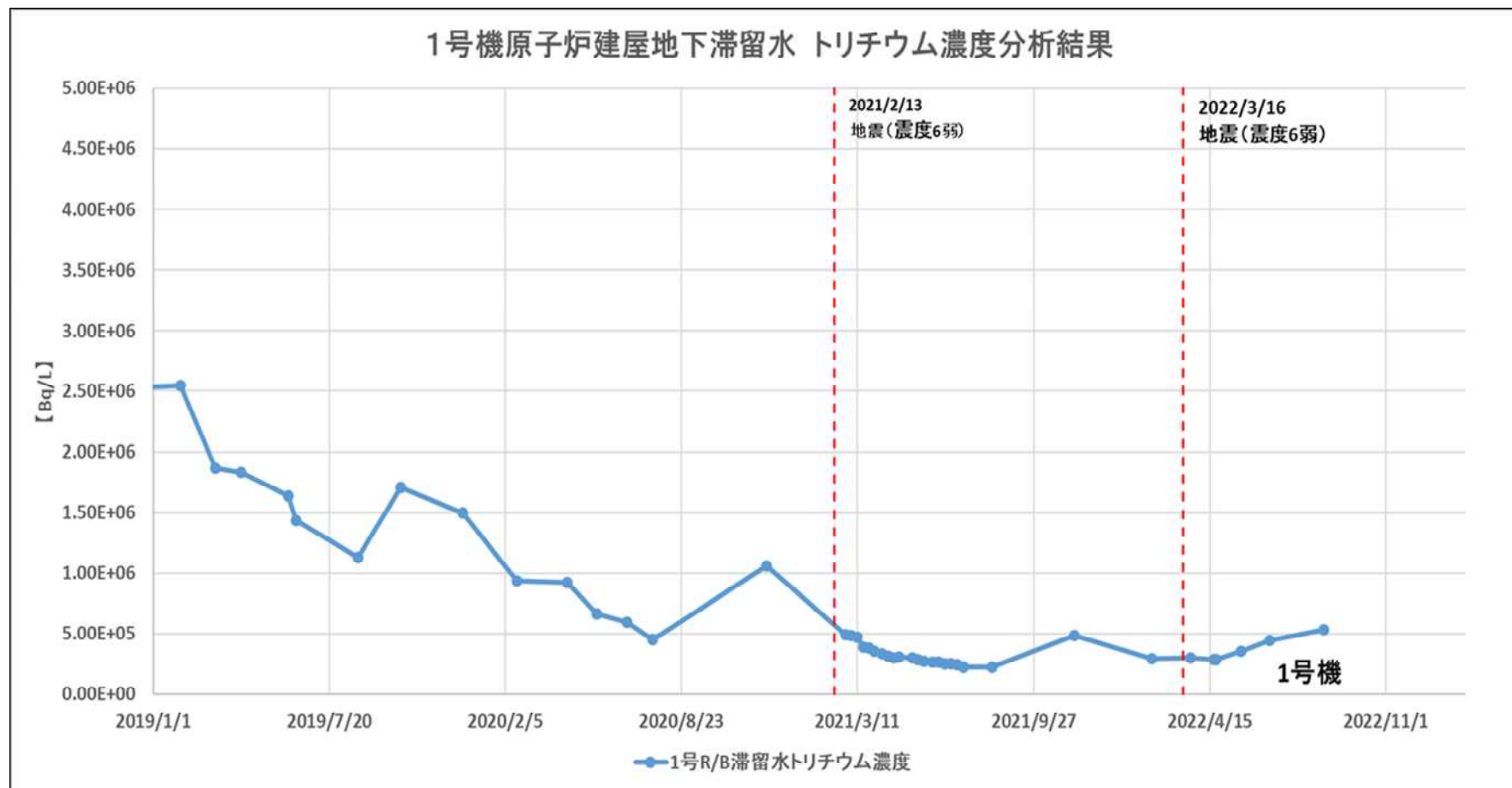
- R/B地下滞留水のトリチウム濃度の変化

3号機

- R/B地下滞留水のトリチウム濃度とPCV、S/C内滞留水のトリチウム濃度からの考察
- その結果を踏まえた、漏洩箇所・漏洩面積の評価

1号機 R/B地下滞留水のトリチウム濃度の変化

- 1号機は、「第102回 特定原子力施設監視・評価検討会の資料3-3」において、S/C下部からの漏洩の可能性があると評価している。
- 2021年2月及び2022年3月の地震後において、R/Bのトリチウム濃度に有意な変化はなかった。



1号機

- R/B地下滞留水のトリチウム濃度の変化

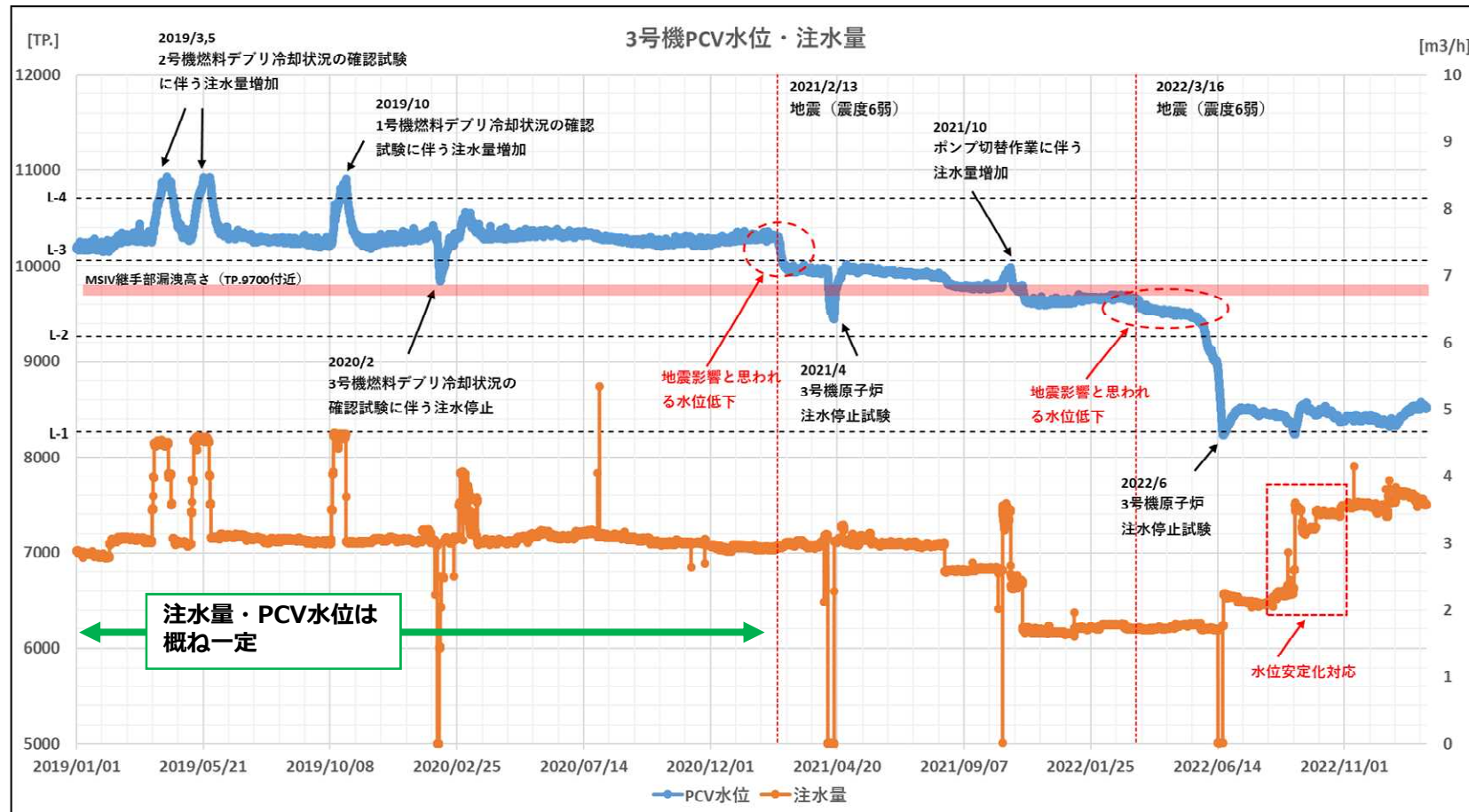
3号機

- R/B地下滞留水のトリチウム濃度とPCV、S/C内滞留水のトリチウム濃度からの考察
- その結果を踏まえた、漏洩箇所・漏洩面積の評価

(参考) 3号機PCV水位と注水量の状況

2019年1月～2023年1月の3号機PCV水位／注水量のトレンドを以下に示す。

- 2019年1月～2021年1月の注水量は概ね一定の状態、PCV水位は概ね安定
- 2021年2月、及び2022年3月の地震後、注水量は安定しているが、PCV水位の低下傾向が見られた。
- 2022年8月～10月にPCV水位を安定させるための流量の増加を実施しているが、その後は、注水量は微調整を行い、PCV水位をL-1（TP.8264）以上で維持している。



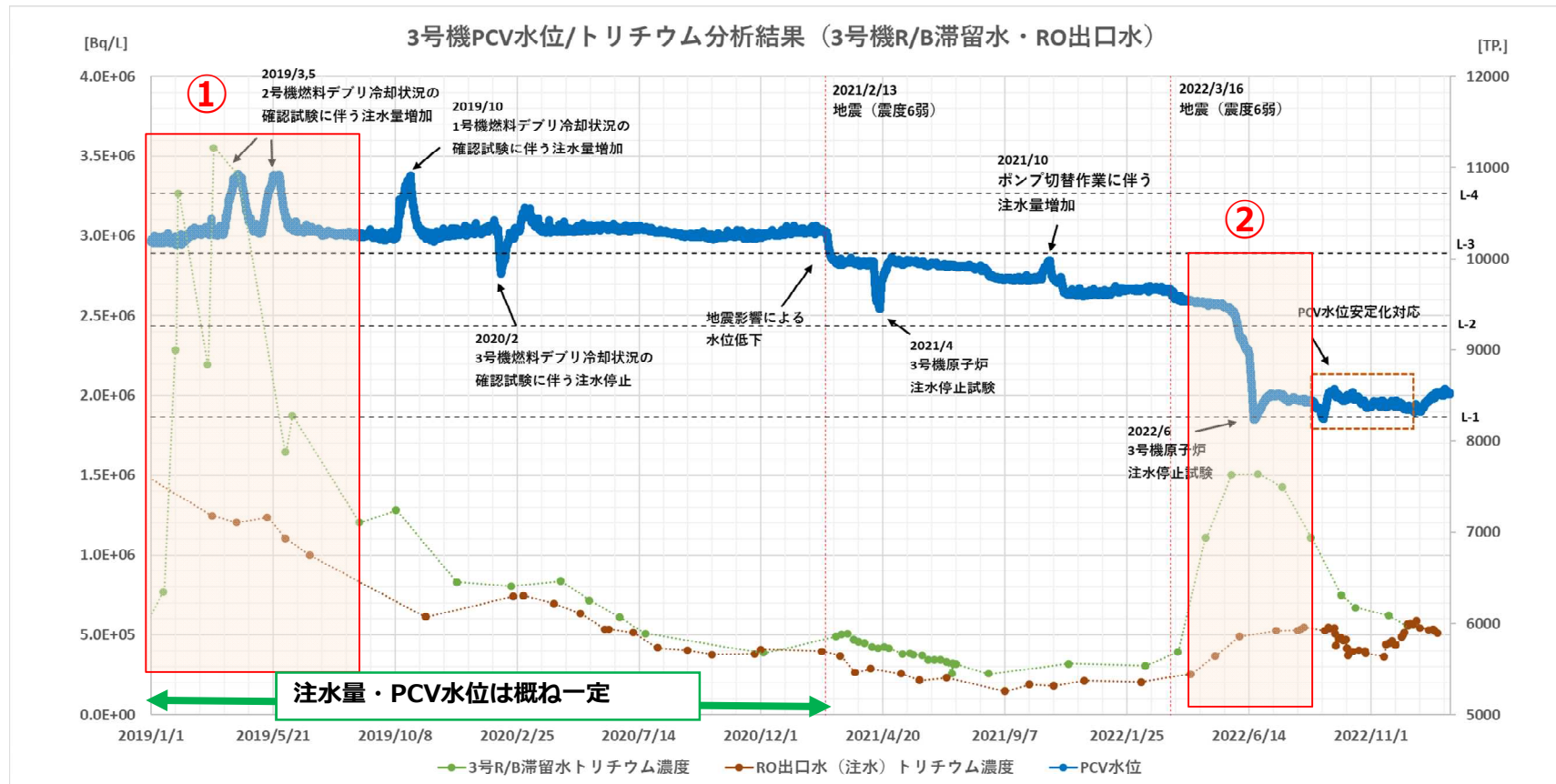
3号機 PCV水位とR/B地下滞留水のトリチウム分析結果



- 2019年1月～2023年1月の3号機PCV水位、R/B地下滞留水等のトリチウム濃度を以下に示す

<考察>

- 2019年、R/B地下滞留水のトリチウム濃度に上昇がみられているが、注水量は概ね一定の状況で、PCV水位は安定しており、関連性は見られなかった。 ⇒ 詳細検討は行わず
- 2022年3月16日の地震以降、R/B地下滞留水のトリチウム濃度は上昇していることから、PCV水位低下との関連性について検討を行った。



3号機 R/B地下滞留水のトリチウム濃度上昇とPCV水位低下の関連性の有無



- 過去のPCV、S/C内のトリチウム分析結果とR/B地下滞留水のトリチウム濃度分布を確認

<考察>

- S/C内滞留水のトリチウム濃度（ $10+6 \sim 10+7$ 【Bq/L】）は、地下滞留水やPCV水面付近、注水（ $10+5$ 【Bq/L】）と比較して、1桁から2桁程度トリチウム濃度が高いことから、S/C内の滞留水がR/Bに漏洩した可能性がある。
- また、S/C内滞留水のトリチウム濃度は、2022年9月から11月にかけて、半減している。

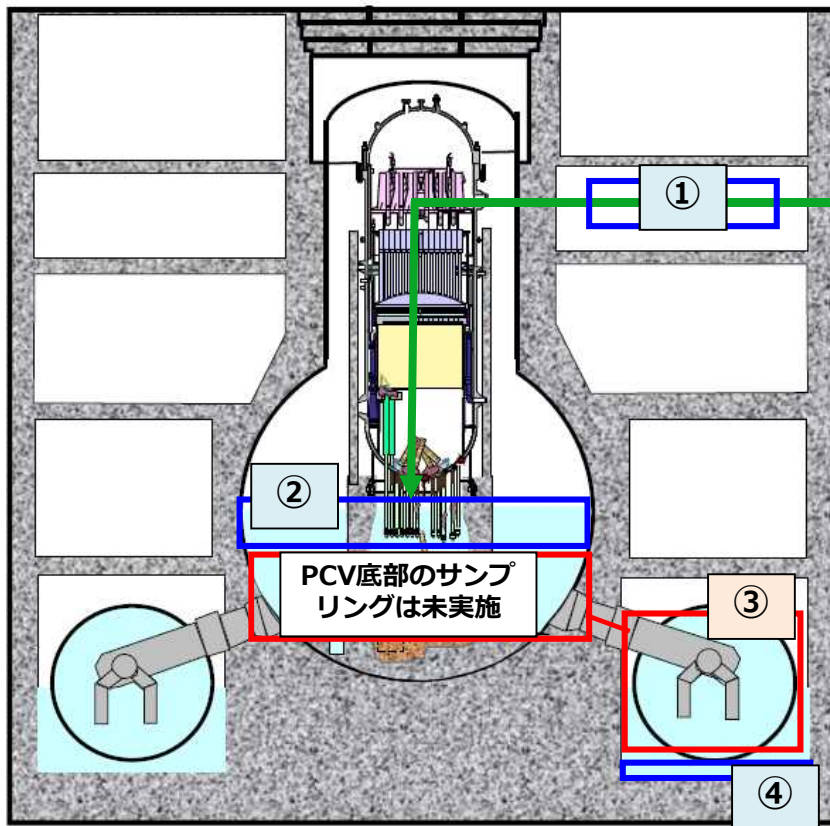


図 4.10.3-1 3号機 2018年9月時点の推定図^[3-18]

①	RO出口水の サンプリング結果		トリチウム濃度【Bq/L】	
	2020年 9月 8日			4.03E+5
2022年 9月 22日			4.34E+5	
②	3号機格納容器内の 滞留水サンプリング結果		トリチウム濃度【Bq/L】	
			水面付近	水面下約0.7m
2015年 10月20、22日		2.7E+5	1.6E+5	
③	3号機S/C内滞留水の サンプリング結果		トリチウム濃度【Bq/L】	
	2020年 9月 18日		1.08E+7	
	2022年 9月 22日		7.92E+6	
	2022年 11月 11日		3.30E+6	
		トリチウム濃度は半減		
④	3号機R/B地下滞留水の サンプリング結果		トリチウム濃度【Bq/L】	
	2020年 7月 21日		5.07E+5	
	2022年 2月 15日		3.07E+5	
	2022年 5月 25日		1.51E+6	

3号機 R/B地下滞留水のトリチウム濃度上昇とPCV水位低下の関連性の検討

<漏洩箇所の考察>

過去の3号機原子炉注水停止試験や、主蒸気配管隔離弁（以下、「MSIV」）室調査等の実績から、主な漏洩箇所は以下の通りと推定

①2022年3月16日以前の主な漏洩箇所は、主蒸気配管隔離弁（以下、「MSIV」）継手部付近

⇒MSIV室内のカメラ確認において、MSIV継手部付近から漏洩を確認（TP.9700付近）

また、PCV水面サンプリング結果とR/B地下滞留水トリチウム濃度に有意な差がないことを確認

② 2022年3月16日以降の漏洩箇所は、S/C（又はPCV底部）の漏洩箇所が拡大した可能性

⇒水位がMSIV継手部付近の漏洩高さを下回っており、R/B地下滞留水のトリチウム濃度が上昇している。

また、S/C内滞留水のトリチウム濃度が低下している。

①2022年3月16日以前の漏洩状況（推定）

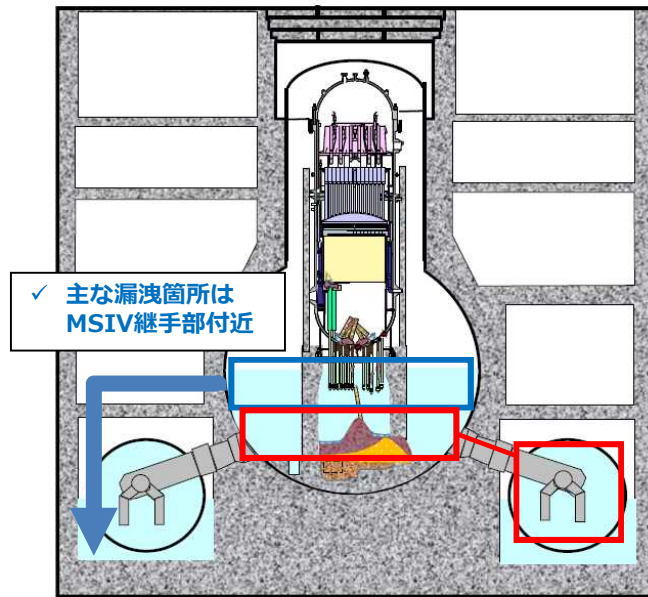
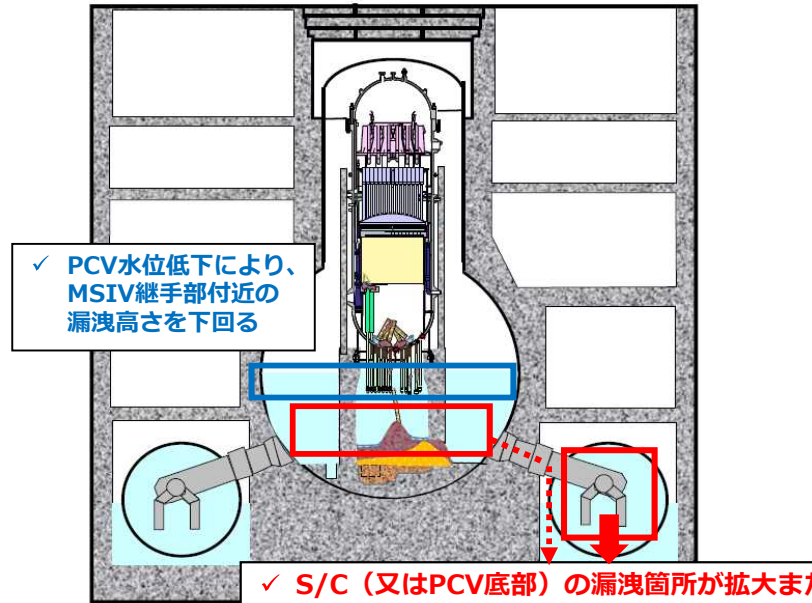


図 4.10.3-1 3号機 2018年9月時点の推定図^[3-18]

②2022年3月16日以降の漏洩状況（推定）



- ✓ S/C（又はPCV底部）の漏洩箇所が拡大または、新たな漏洩口の可能性
- ✓ 高濃度トリチウム水の漏洩に伴い、R/B地下滞留水トリチウム濃度が上昇した可能性

図 4.1

1号機

- R/B地下滞留水のトリチウム濃度の変化

3号機

- R/B地下滞留水のトリチウム濃度とPCV、S/C内滞留水のトリチウム濃度からの考察
- その結果を踏まえた、漏洩箇所・漏洩面積の評価

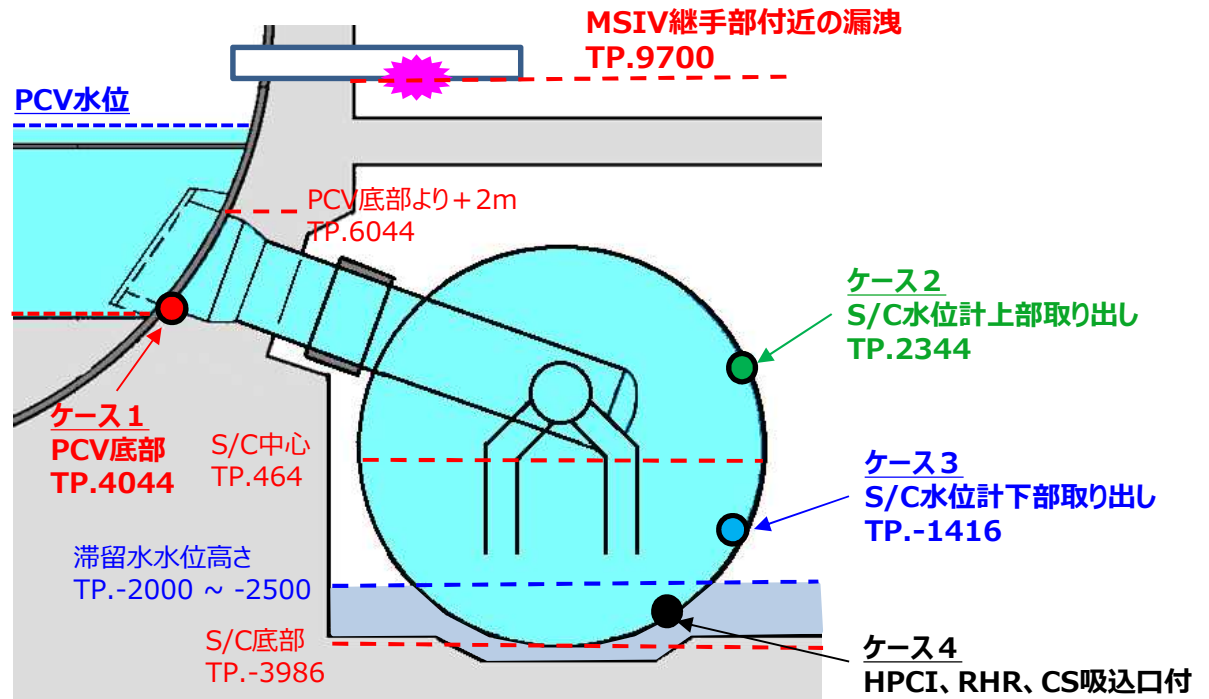
- ＜損傷箇所（高さ）・漏洩面積の評価について＞
- PCV底部、又はS/Cにおいて新たな漏洩が発生したと仮定し、実績の注水量を元にPCV水位の実績を再現するような漏洩高さとして漏洩面積を推定した。
 - 漏洩高さの設定については、PCV底部やS/C主要機器の設置高さを参考にした。
 - ケース1：PCV底部(TP.4044)
 - ケース2：S/C水位計上部取り出し(TP.2344)
 - ケース3：S/C水位計下部取り出し(TP.-1416)
 - ケース4：HPCI、RHR、CS吸込口付近(TP.-3181)

評価の考え方

計算式

$$S = \frac{V}{\sqrt{2g(H-h)}}$$

- S：漏洩面積 (m²)
- V：漏洩量 (m³/s)
- H：PCV水位 (m)
- h：漏洩高さ (m)
- g：重力加速度 (9.8m/s²)
- ※流体抵抗等は考慮せず



3号機の漏洩箇所・漏洩面積の評価について

- 実績PCV水位を基に、仮定した漏洩高さ・漏洩面積を仮定し、再現性確認を実施した

<評価条件>

- PCV上部（MSIV継手部付近）の漏洩量については不確かさがあることから、MSIV継手部付近の漏洩高さ（TP.9700付近）を下回った時期で実施（2022年3月の地震、6月の原子炉注停止試験後の漏洩状況を推測）
- PCV水位と注水量が安定していた時期について、漏洩高さ・漏洩面積を仮定し、短期トレンド（1ヶ月程度）で評価を行い、長期トレンドに引き延ばして傾向を確認

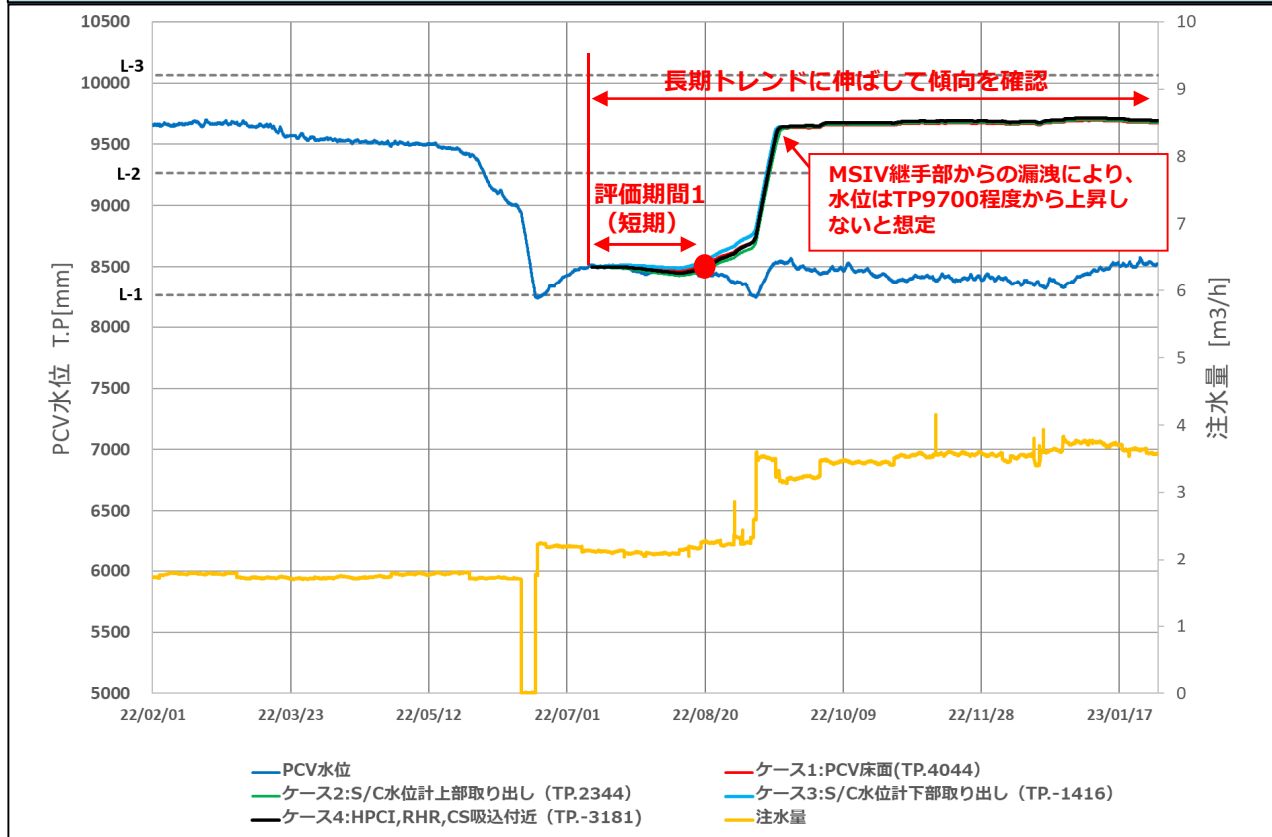
評価期間	評価内容	PCV状態
評価期間 1 ・ 2022年 7月中旬 ～ 1ヶ月程度	<ul style="list-style-type: none"> 漏洩口の高さを仮定 漏洩口の面積を仮定 	PCV水位：約TP.8500 注水量：約2.1m ³ /h
評価期間 2 ・ 2022年 9月中旬 ～ 1ヶ月程度	<ul style="list-style-type: none"> 漏洩口の面積を調整 	PCV水位：約TP.8500 注水量：約3.2m ³ /h
評価期間3 ・ 2022年10月中旬 ～ 1ヶ月程度	<ul style="list-style-type: none"> 漏洩口の面積を調整 	PCV水位：約TP.8400 注水量：約3.5m ³ /h

3号機の漏洩箇所・漏洩面積の評価について（評価期間 1）

<確認結果：評価期間 1>

- 長期の再現性確認では、PCV水位が上昇する結果となり一致しない結果となった。
- 各漏洩高さの評価結果に有意な差はなく、漏洩高さを結論付ける結果にならなかった。
- 仮定した漏洩面積（漏洩量）よりも、漏洩面積が増加したものと推定。

評価 1：2022年7月中旬～



ケース	仮定漏洩高さ	仮定漏洩面積
1	PCV床面 (TP.4044)	0.63cm ²
2	S/C水位計上部取り出し (TP. 2344)	0.54cm ²
3	S/C水位計下部取り出し (TP.-1416)	0.42cm ²
4	HPCI、RHR、CS吸込口付近 (TP. -3181)	0.39cm ²

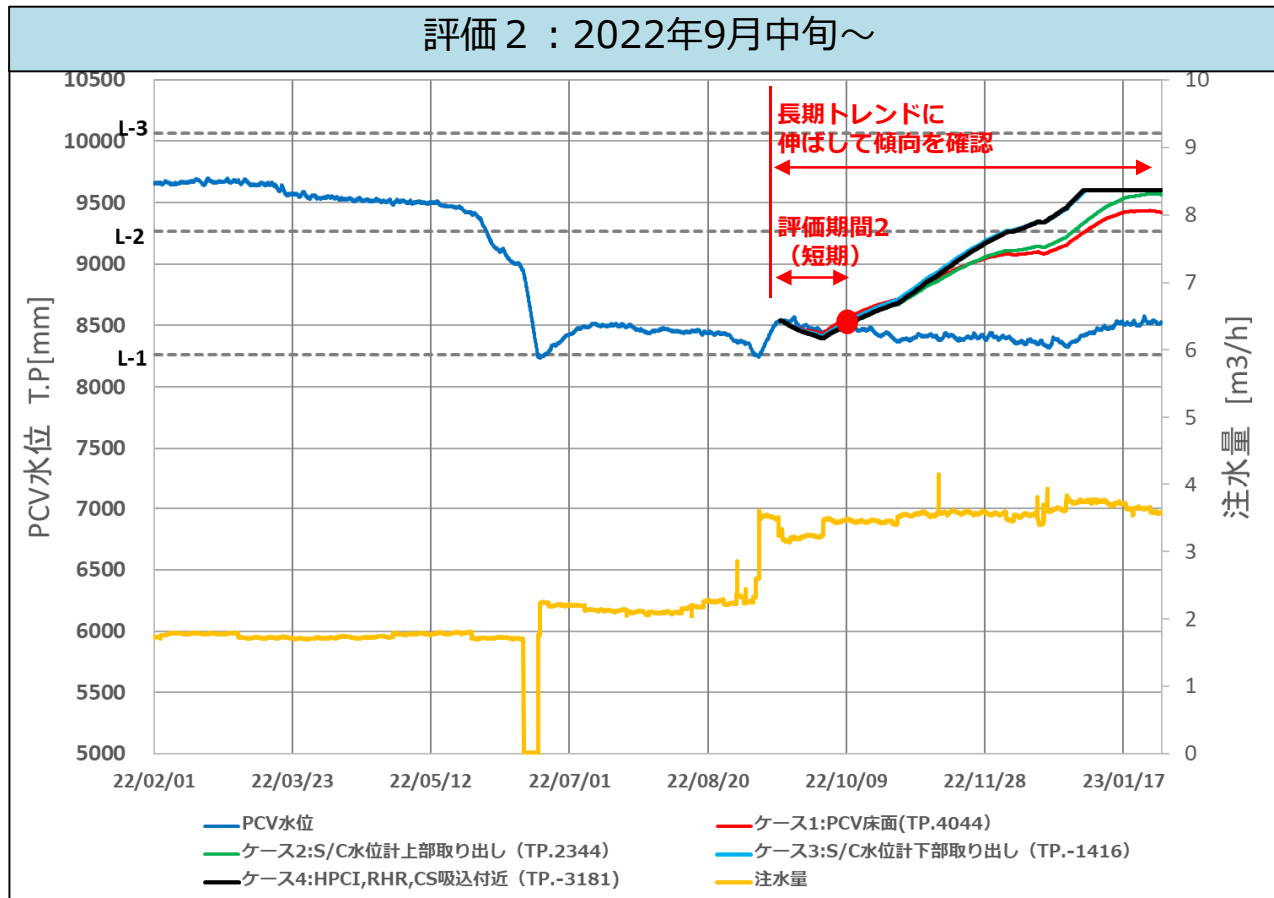
● : PCV水位の評価値と実績値の転換点

3号機の漏洩箇所・漏洩面積の評価について（評価期間2）

<確認結果：評価期間2>

- 長期の再現性確認では、PCV水位が上昇する結果となり一致しない結果となった。
- 各漏洩高さの評価結果に有意な差はなく、漏洩高さを結論付ける結果にならなかった。
- 仮定した漏洩面積（漏洩量）よりも、漏洩面積が増加したものと推定。

評価2：2022年9月中旬～



調整

ケース	仮定漏洩高さ	仮定漏洩面積
1	PCV床面 (TP.4044)	0.98cm ²
2	S/C水位計 上部取り出し (TP. 2344)	0.84cm ²
3	S/C水位計 下部取り出し (TP.-1416)	0.66cm ²
4	HPCI、RHR、CS 吸込口付近 (TP. -3181)	0.61cm ²

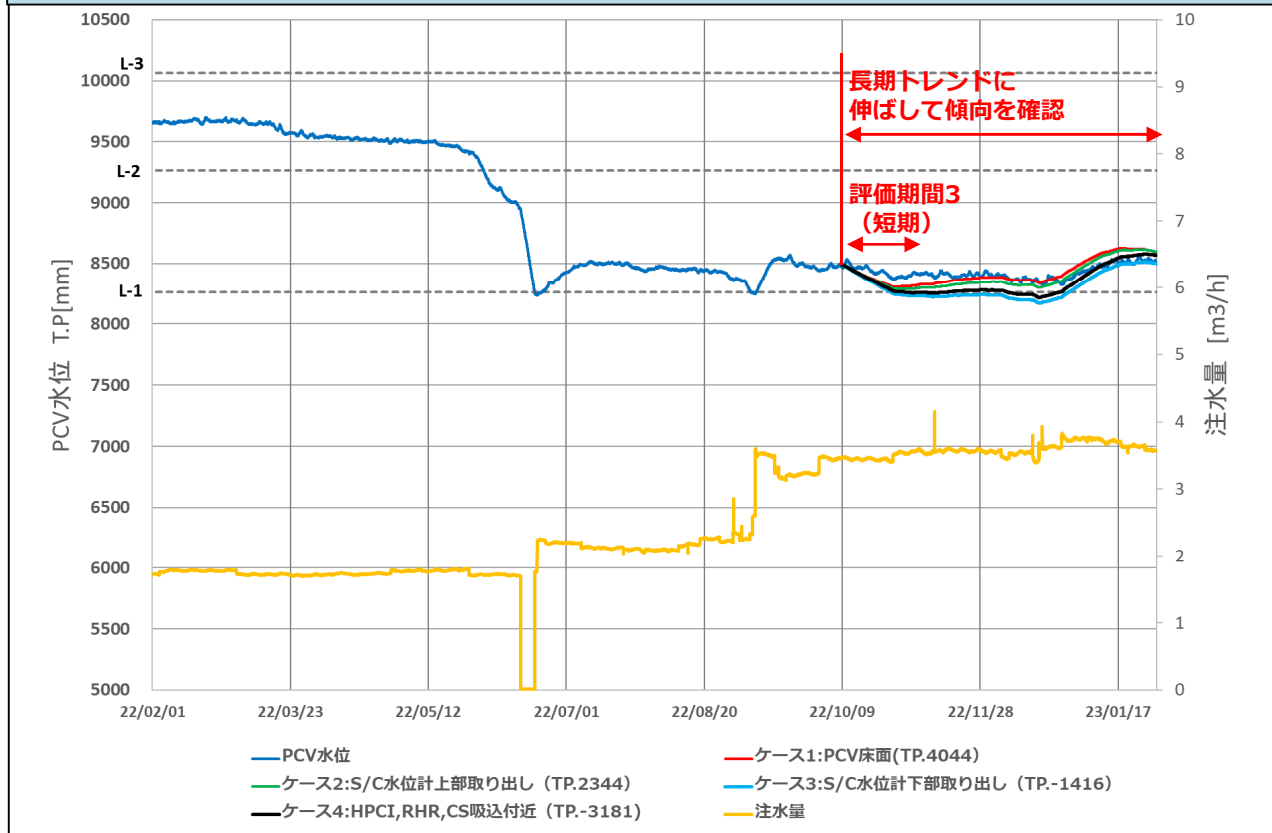
●：PCV水位の評価値と実績値の転換点

3号機の漏洩箇所・漏洩面積の評価について（評価期間3）

<確認結果：評価期間3>

- 長期の再現性確認では、～2023年1月まで実績水位と概ね一致している。
- 各漏洩高さの評価結果に有意な差はなく、漏洩高さを結論付ける結果にならなかった。
- このため、2022年10月以降は、漏洩口の大きさは、概ね一定であると推定される。
(注水量約3.5m³/h～3.6m³/h)

評価3：2022年10月中旬～



調整

ケース	仮定漏洩高さ	仮定漏洩面積
1	PCV床面 (TP.4044)	1.07cm ²
2	S/C水位計上部取り出し (TP. 2344)	0.91cm ²
3	S/C水位計下部取り出し (TP.-1416)	0.72cm ²
4	HPCI、RHR、CS吸込付近 (TP. -3181)	0.66cm ²

まとめ

1号機

- 2021年2月及び2022年3月の地震後において、R/B地下滞留水のトリチウム濃度に有意な変化はなく、PCV水位低下の漏洩箇所の推定につながる追加情報は得られなかった。

3号機

- R/B地下滞留水のトリチウム濃度やPCV、S/C内の滞留水のトリチウム濃度の状況から、2022年3月16日以降、S/C（または、PCV底部）において、漏洩面積が増加、または新たな漏洩が発生した可能性がある。
- 一方、2022年8月以降、PCV底部、S/Cに漏洩高さを仮定し、実績トレンドとの再現性を確認したが、各漏洩高さの評価結果に有意な差がなく、漏洩高さの推定に繋がるような結果が得られなかった。

<今後の対応>

- 新設水位計設置以降に計画しているPCV水位の低下の中で、PCV水位の挙動を確認し、漏洩箇所の特定に向けた評価を継続していく。

参考

特定原子力施設監視・評価検討会
(第102回)
資料3-3

1号機原子炉格納容器の漏洩箇所 の推定

2022年9月12日



TEPCO

東京電力ホールディングス株式会社

● 1号機原子炉格納容器(以下:PCV)の漏洩箇所

- 1号機ではこれまでの調査により、真空破壊ラインベローズおよびサンドクッションドレン配管の外れ箇所の2カ所からの漏洩が確認されており、PCV水位/注水量/漏洩量のバランスを考慮すると、漏洩箇所は上記2カ所以外にも存在すると想定している。

● 2021年2月13日及び2022年3月16日の地震による対応

- 地震発生後、PCV水位低下傾向が確認されたことから、注水量を増加させてPCV水位を安定させている。

これらの状況を踏まえ、実績の注水量を元に、炉注水停止試験や長期的なPCV水位の実績を再現するようなPCVの漏洩高さや漏洩面積を推定した。

評価期間	2017年4月～	2021年2月13日～	2022年3月16日～
評価期間 1 ・ 漏洩口の高さを仮定(不明箇所) ・ 漏洩口の面積設定			
評価期間 2 ・ 漏洩口の面積調整			
評価期間 3 ・ 漏洩口の面積調整			
PCV水位安定時の炉注水量 (接点式水位計：L3接点時)	約3.0m ³ /h	約3.5m ³ /h	約4.0m ³ /h

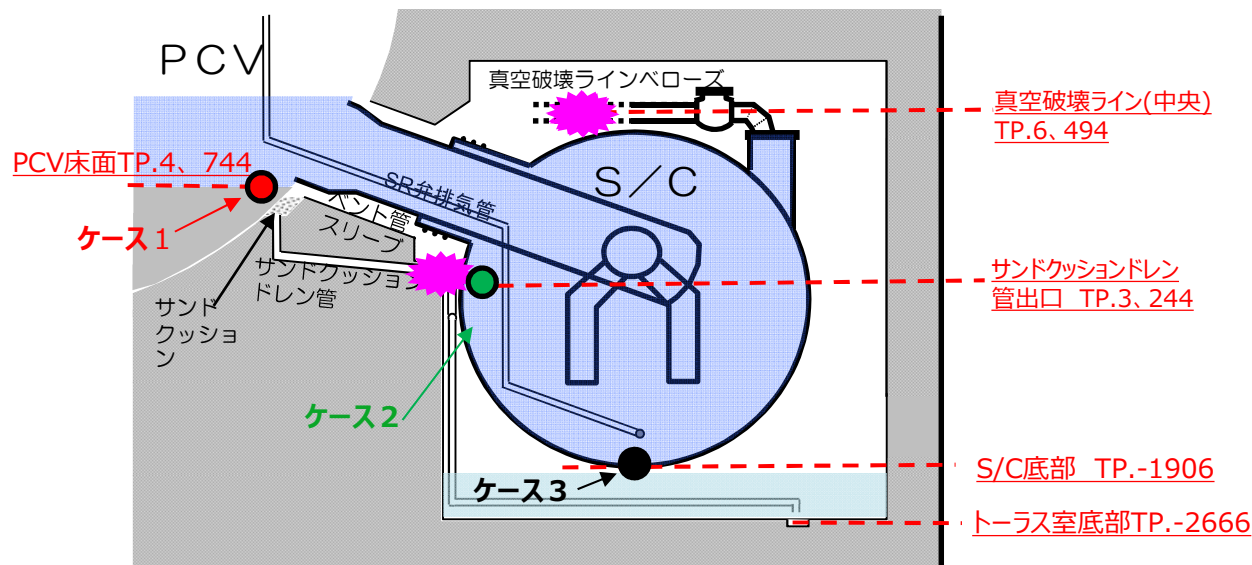
- ・確認されている漏洩箇所（真空破壊ラインベローズ、サンドクッションドレン管の配管外れ箇所）に加えて、さらにPCV床面またはS/Cに1か所の漏洩（不明箇所）を仮定
- ・各漏洩高さにおいて、実際のPCV水位(接点式レベルスイッチ等)を概ね再現するような漏洩面積※を推定

※ サンドクッションドレン管の配管外れ箇所については、配管からの漏洩であり漏洩量が少ないことから、調査時の漏洩量:0.15m³/hから、漏洩面積:0.055cm²で一定と設定

計算式

$$S = \frac{V}{\sqrt{2g(H-h)}}$$

- S : 漏洩面積 (m²)
- V : 漏洩量 (m³/s)
- H : PCV水位 (m)
- h : 漏洩高さ (m)
- g : 重力加速度 (9.8m/s²)
- ※流体抵抗等は考慮せず



<分析のアプローチ>

①PCV床面またはS/C（不明箇所）の漏洩面積

- ・漏えい箇所が複数あることから、まずは、2019年と2020年に実施した注水停止試験時において、PCV水位が真空破壊ラインベローズ未満となる期間で漏洩面積を推定（仮定した漏洩高さは3ケース ケース1：PCV床面、ケース2：サンドクッションドレン管の配管外れ箇所、ケース3：S/C底部 を設定）

②真空破壊ラインベローズからの漏洩面積

- ・①で評価した漏洩面積を考慮した上で、真空破壊ラインベローズを上回る期間において、真空破壊ラインベローズの漏洩面積を評価し、長期期的なPCV水位データの再現性を確認

<評価期間 1 >

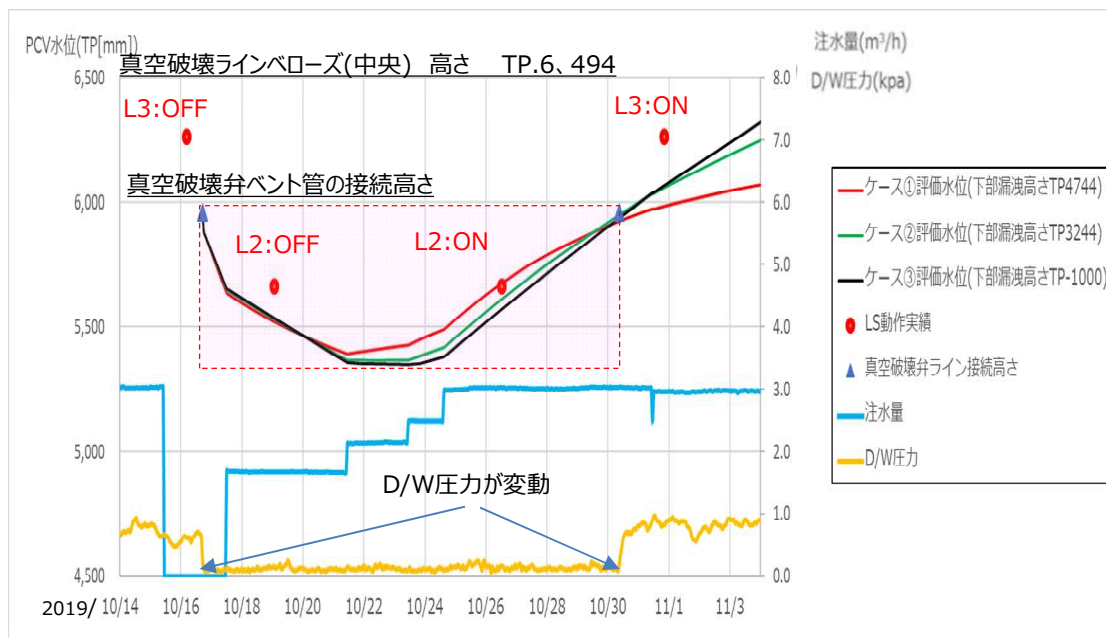
2017年4月～2021年2月

①PCV床面またはS/C（不明箇所）の漏洩面積の評価(1/2)

2019年注水停止試験時のPCV水位挙動に基づく推定



- PCV水位が上部の漏洩箇所である真空破壊ラインベローズを下回る期間において、仮定したPCV床面またはS/C（不明箇所）の漏洩面積をそれぞれ評価
- 具体的には、2019年注水停止試験時のPCV水位の実績から、PCV水位が真空破壊弁ベント管の接続高さ（D/W圧力の変動あり）になるように漏洩面積を評価



ケース	仮定	調整
	①不明箇所漏洩高さ	①不明箇所漏洩面積
1	PCV床面高さ (TP.4744)	1.45cm ²
2	サンドクッションドレン管の配管外れ箇所高さ (TP.3244付近)	0.87cm ²
3	試験時のS/C室滞留水水位 (TP.-1000)	0.52cm ²

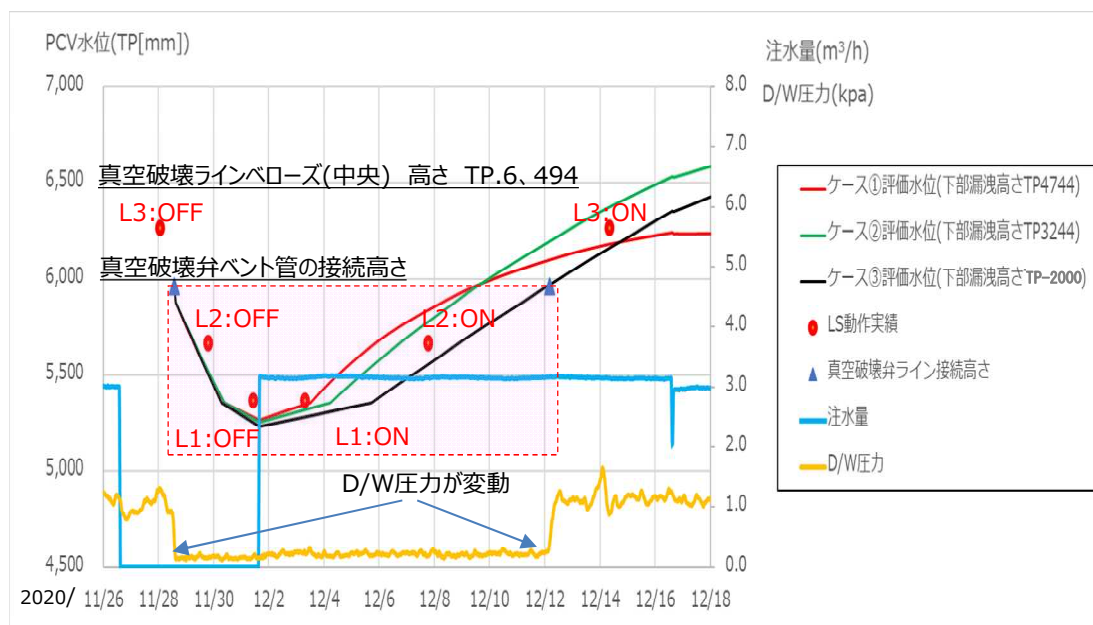
※過去に漏洩が確認されているサンドクッションドレン管の配管外れ箇所からの漏洩は別途考慮(2013年の調査結果から漏えい量:0.15m³/h⇔漏洩面積:0.055cm²(一定))

<考察>

- PCVの実績水位の再現性は、ケース1と比較して、ケース2、ケース3の方が良い。

①PCV床面またはS/C（不明箇所）の漏洩面積の評価(2/2)
 2019年注水停止試験時の推定に基づく2020年注水停止試験の再現性確認

- 2019年注水停止試験データを再現するように設定した漏洩高さや漏洩面積を用いて、2020年の注水停止試験データで同様に再現性を確認



ケース	①不明箇所漏洩高さ	①不明箇所漏洩面積
1	PCV床面高さ (TP.4744)	1.45cm ²
2	サンドクッションドレン管の配管外れ箇所高さ (TP.3244付近)	0.87cm ²
3	試験時のS/C室滞留水水位 (TP.-2000)変更	0.52cm ²

※過去に漏洩が確認されているサンドクッションドレン管の配管外れ箇所からの漏洩は別途考慮(2013年の調査結果から漏えい量:0.15m³/h⇨漏洩面積:0.055cm²(一定))

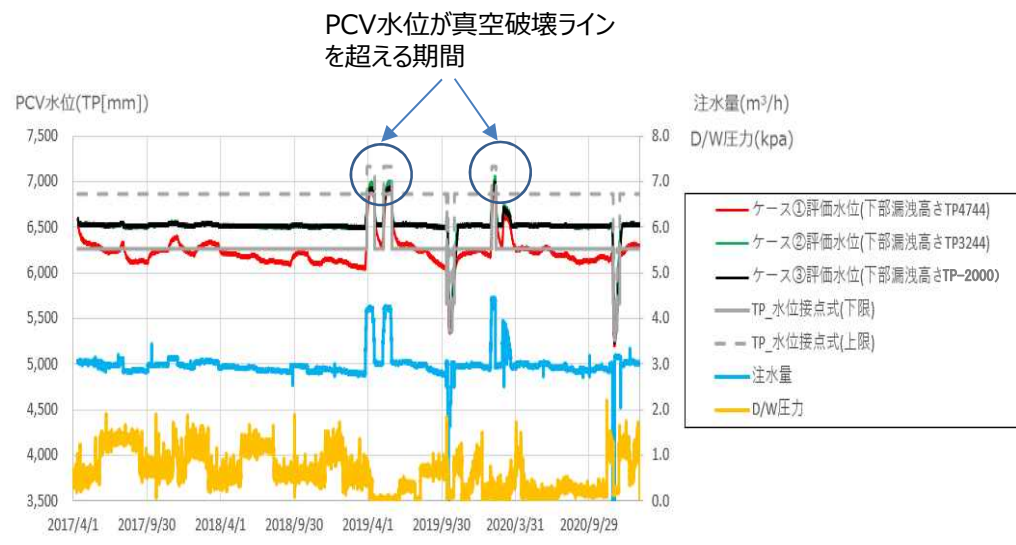
<考察>

- 漏洩高さが1番低いケース3(漏洩高さTP-2000)の再現性が良い。

②真空破壊ラインベローズからの漏洩面積の評価 長期的なPCV水位挙動に基づく推定

- 注水停止試験の評価から推定した「①PCV床面またはS/C（不明箇所）の漏洩面積」に加えて、PCV実績水位が真空破壊ラインベローズを超える期間の水位を再現するよう、「②真空破壊ラインベローズからの漏洩面積」を設定し、長期的なPCVの実績水位(接点式レベルスイッチ等)の再現性を確認

追加設定



ケース	①不明箇所漏洩高さ	①不明箇所漏洩面積	②真空破壊ラインベローズ漏洩高さ	②真空破壊ラインベローズ漏洩面積
1	PCV床面高さ(TP.4744)	1.45cm ²	真空破壊ライン(中央)TP.6494	0.50cm ²
2	サンドクッションドレン管の配管外れ箇所高さ(TP.3244付近)	0.87cm ²		1.20cm ²
3	試験時のS/C室滞留水水位(TP.-2000)	0.52cm ²		1.50cm ²

※過去に漏洩が確認されているサンドクッションドレン管の配管外れ箇所からの漏洩は別途考慮(2013年の調査結果から漏えい量:0.15m³/h≒漏洩面積:0.055cm²(一定))

<考察>

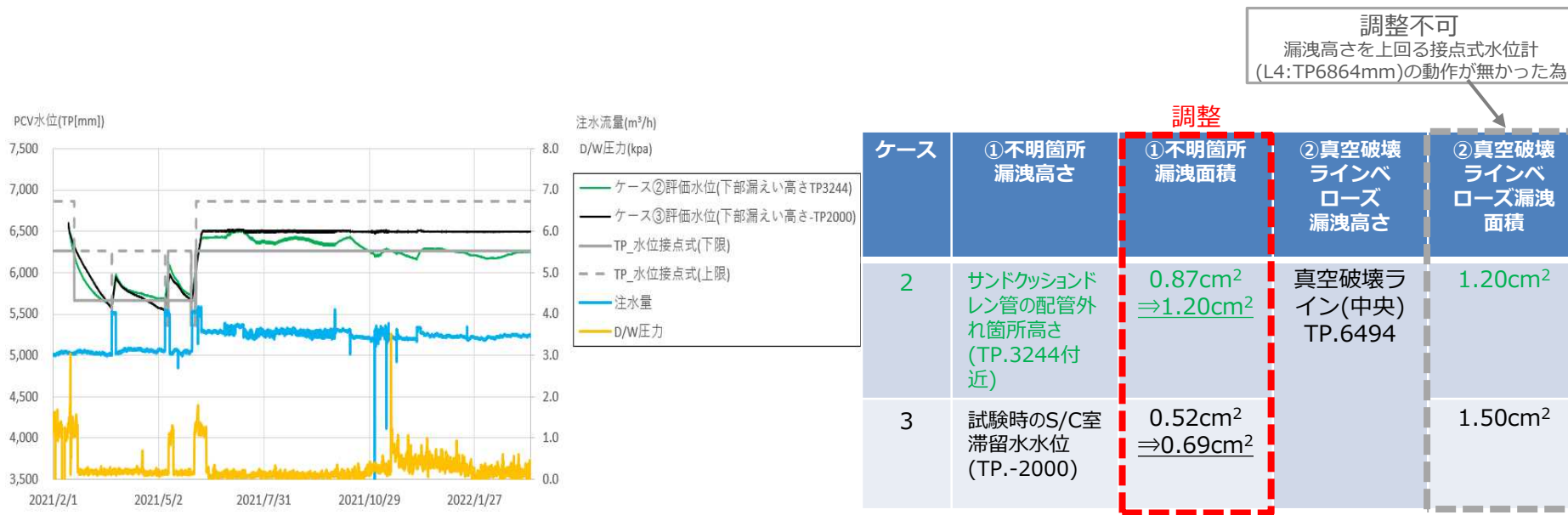
- 3ケースともに、「②真空破壊ラインベローズからの漏洩面積」を設定することで、真空破壊ライン（TP6494（中央高さ））以上の水位挙動を概ね再現
- 一方、長期的なトレンドの評価では、ケース1では、PCVの実績水位(接点式LS)の範囲外になる期間が発生したため、漏洩箇所は比較的低い位置にあると評価

⇒以降はケース2、3のみ評価

<評価期間 2 : 2021年2月13日地震後>
2021年2月～2022年3月

2021年2月13日以降の漏洩面積の評価 長期的なPCV水位挙動に基づく推定

- 評価期間 1 で設定した「①PCV床面またはS/C（不明箇所）の漏洩面積」および「②真空破壊ラインベローズからの漏洩面積」を基に、地震後のPCV水位計挙動(接点式レベルスイッチ等)を再現するように 漏洩面積を調整



※過去に漏洩が確認されているサンドクッションドレン管の配管外れ箇所からの漏洩は別途考慮(2013年の調査結果から漏えい量:0.15m³/h⇔漏洩面積:0.055cm²(一定))

<考察>

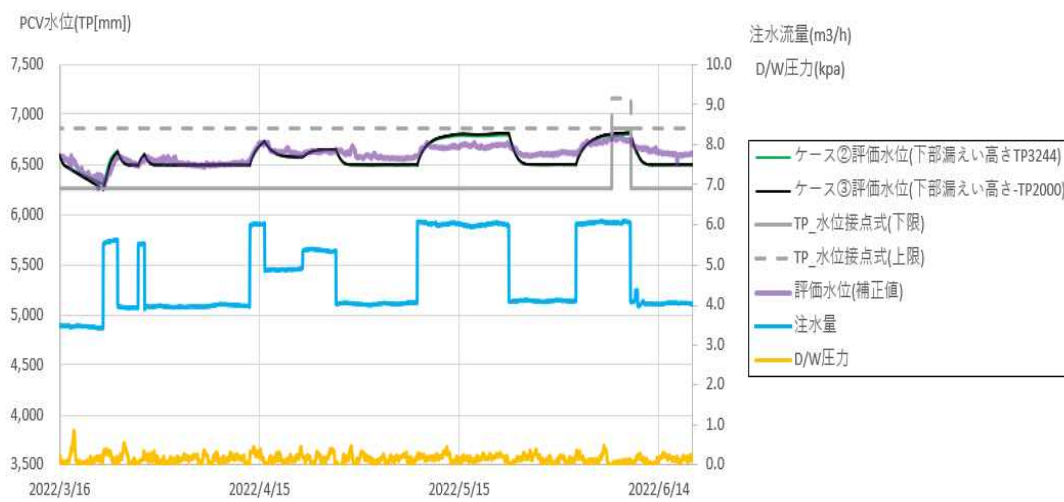
- ケース2、ケース3ともに、地震後の2021年2月～2021年6月の期間では、「①PCV床面またはS/C（不明箇所）の漏洩面積」を増加させる事で、概ねPCV実績水位(接点式LS)の挙動を再現。
- 一方、ケース2の長期的なトレンドでは、PCV実績水位(接点式LS)の範囲外になる期間が発生

<評価期間 3 : 2022年3月16日地震後>
2022年3月～

2022年3月16日以降の漏洩面積の評価 長期的なPCV水位挙動に基づく推定



- 評価期間2で設定した「①PCV床面またはS/C（不明箇所）の漏洩面積」および「②真空破壊ラインベローズからの漏洩面積」を基に、再度、地震後のPCV水位計挙動(接点式レベルスイッチおよび評価水位)を再現するように漏洩面積を調整



ケース	①不明箇所漏洩高さ	調整	
		①不明箇所漏洩面積	②真空破壊ベローズ漏洩高さ
2	サンドクッションドレン管の配管外れ箇所高さ (TP.3244付近)	1.20cm ² ⇒ 1.25cm²	真空破壊ライン (中央) TP.6494
3	試験時のS/C室滞留水水位 (TP.-2000)	0.69cm ² ⇒ 0.78cm²	②真空破壊ベローズ漏洩面積 1.20cm ² ⇒ 2.40cm²

※過去に漏洩が確認されているサンドクッションドレン管の配管外れ箇所からの漏洩は別途考慮(2013年の調査結果から漏えい量:0.15m³/h⇨漏洩面積:0.055cm²(一定))

<考察>

ケース2およびケース3のいずれも、地震後の「①PCV床面またはS/C（不明箇所）の漏洩面積」と「②真空破壊ラインベローズからの漏洩面積」を増加させる事で、概ねPCV水位(接点式LS及び評価水位)を再現

まとめ（1号機）

- PCV床面またはS/C（不明箇所）からの漏洩については、漏洩高さを低く設定したケースほど再現性が良いことを確認
 - 再現性の良さ：ケース3(TP.-2000)>ケース2(TP.3244)>ケース1(TP.4744)
- 今回の評価結果から、不明箇所の漏洩高さをケース3と仮定すると漏洩箇所の面積は下記の通りと推定

〈ケース3での漏洩面積の推移〉

	評価期間1 2017年4月～	評価期間2 2021年2月13日～2022年3月16日	評価期間3 2022年3月16日～
真空破壊ラインベローズ	1.50cm ²	(1.50cm ²) 当該期間では漏洩高さを上回る水位(L4) 以上が無かった為、調整できず参考値	2.40cm ² 漏洩量：約0.24m ³ /h※
サンドクッションドレン管（外れ箇所） （漏洩面積は一定として評価）	0.055cm ²	0.055cm ²	0.055cm ² 漏洩量：約0.16m ³ /h※
S/C底部 （不明箇所）	0.52cm ²	0.69cm ²	0.78cm ² 漏洩量：約3.60m ³ /h※

※ 評価期間3の漏洩量は、注水量が約4.0m³/h、PCV水位がTP.6497付近で安定時の評価

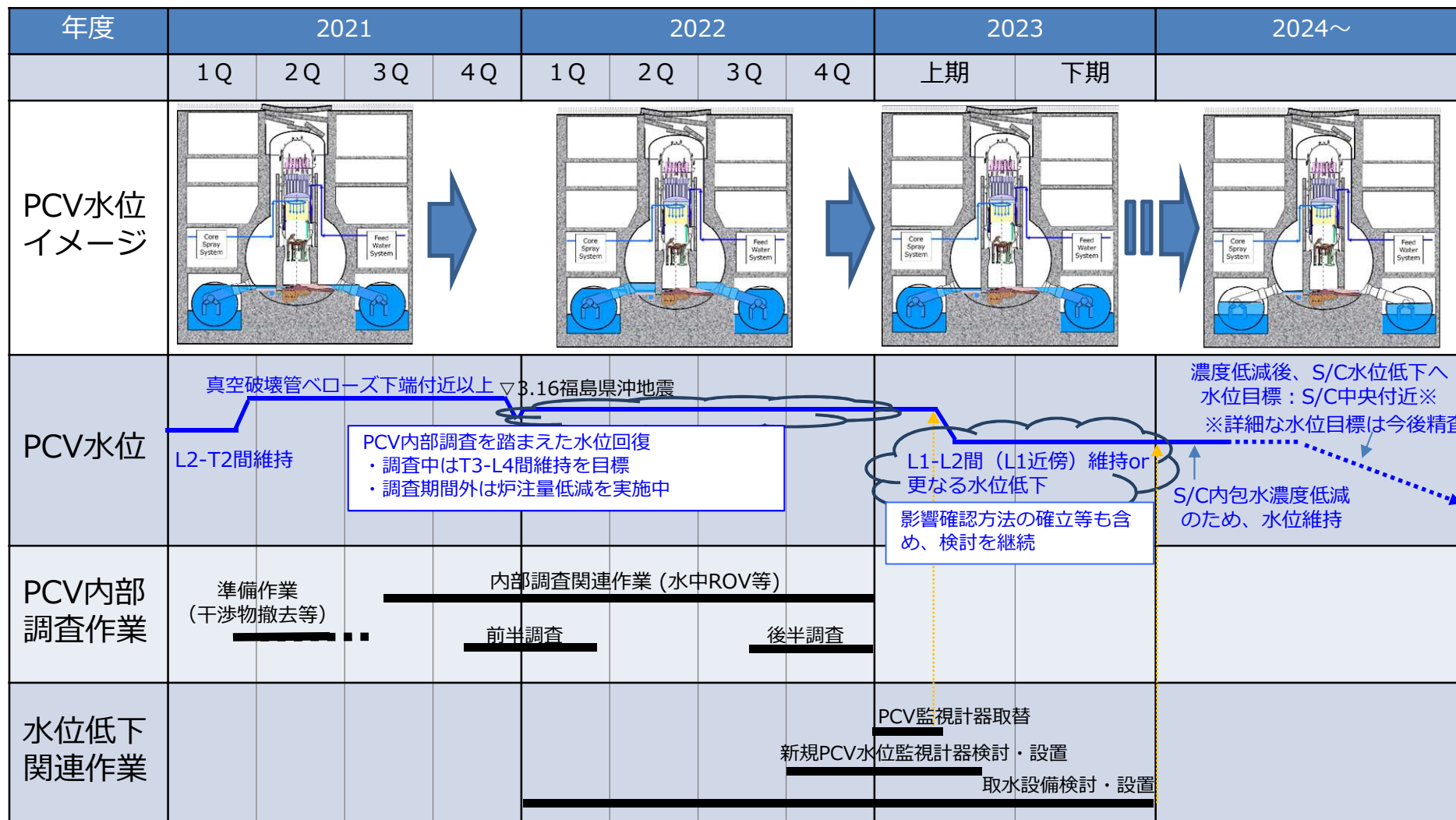
【今後の対応】

- 今回の評価によって、比較的低い高さ（S/C底部付近等）に漏洩箇所がある可能性が抽出された。
- 今後、PCV内部調査後に計画しているPCV水位低下の中で、PCV水位の挙動を確認し、漏洩箇所の特定に向けた評価を継続して行く。
- また、今回評価で得られた知見を、今後の水位低下計画の具体的な検討に活用していく。

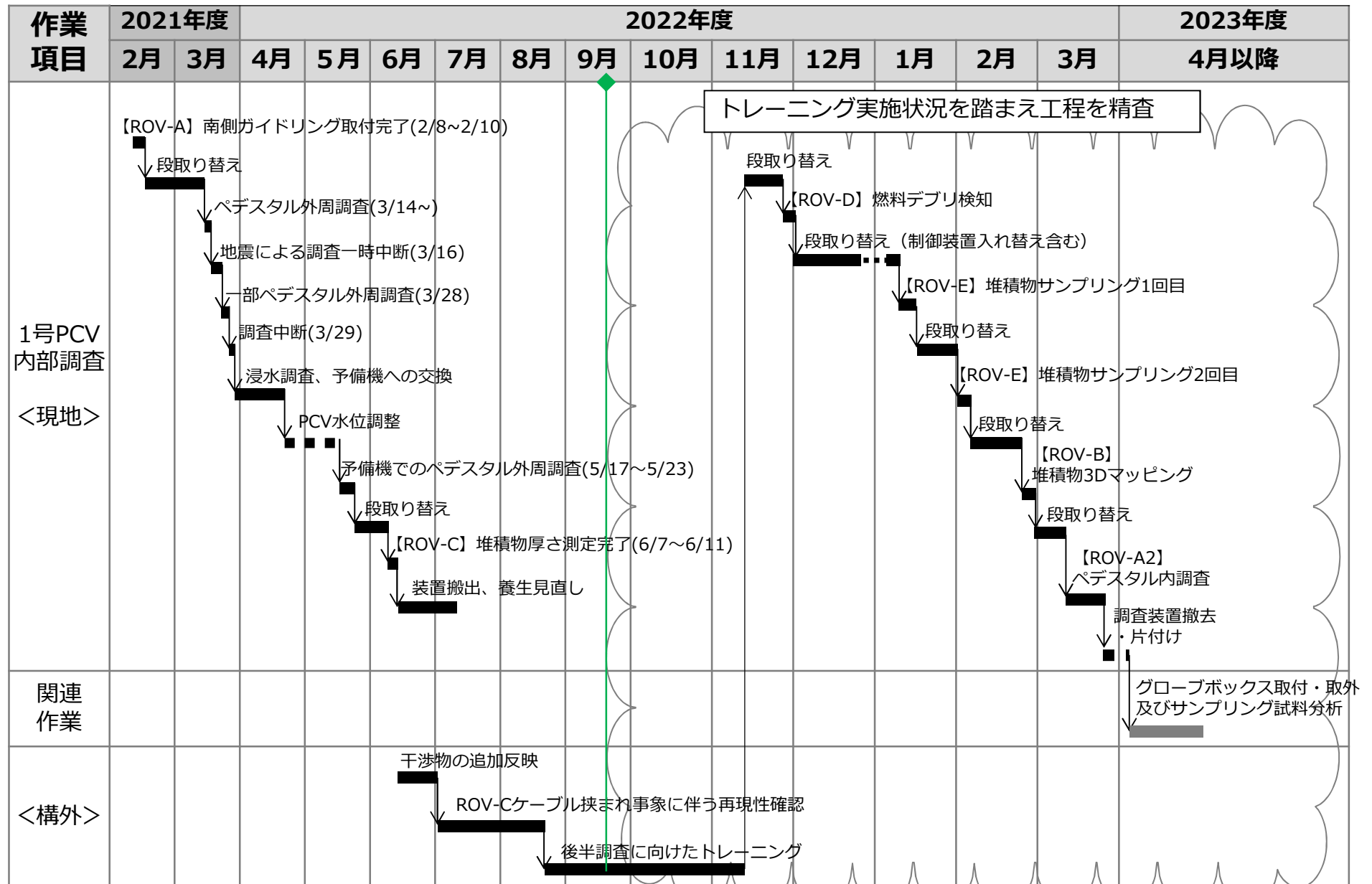
(参考) 1号機 PCV内部調査後のPCV水位低下の取り組み



- 当面（2022年度）は、デブリ取り出しに向けたPCV内部調査作業のため、調査期間中はT3-L4間を目標にPCV水位を維持し、調査期間外は炉注量低減を実施中
- その後、原子炉圧力容器(RPV)温度、PCV温度を確認しながら、段階的にPCV水位を低下させ、最終的には、圧力抑制室（S/C）水位の低下を目指していく



(参考) 1号機PCV内部調査全体工程



(注) 各作業の実施時期については計画であり、現場作業の進捗状況によって時期は変更の可能性あり。

<参考> 3号機 原子炉格納容器の漏洩箇所 の推定

● 3号機PCVの漏洩箇所

- 過去の調査により、主蒸気隔離弁（以下、MSIVという）室内2箇所より漏洩が確認されている。
 - ・MSIV（D）伸縮接手部（2014年調査：約TP.9700 鉛筆2～4本）
 - ・MSIV（A）配管下部に波面を確認（漏洩箇所、漏洩量は特定できず）（2021年調査）
- 注水停止試験（2022年6月～7月）時に、PCV水位が一定の傾きで低下したことから、PCV下部の漏洩箇所は試験で経験した水位（PCV底部から約4.2m 約TP8264）よりも比較的低い位置にあることが推定されている。

● 2021年2月13日及び2022年3月16日の地震による対応

地震発生後、PCV水位低下傾向が確認されたことから、注水量を増加させてPCV水位を安定させている。

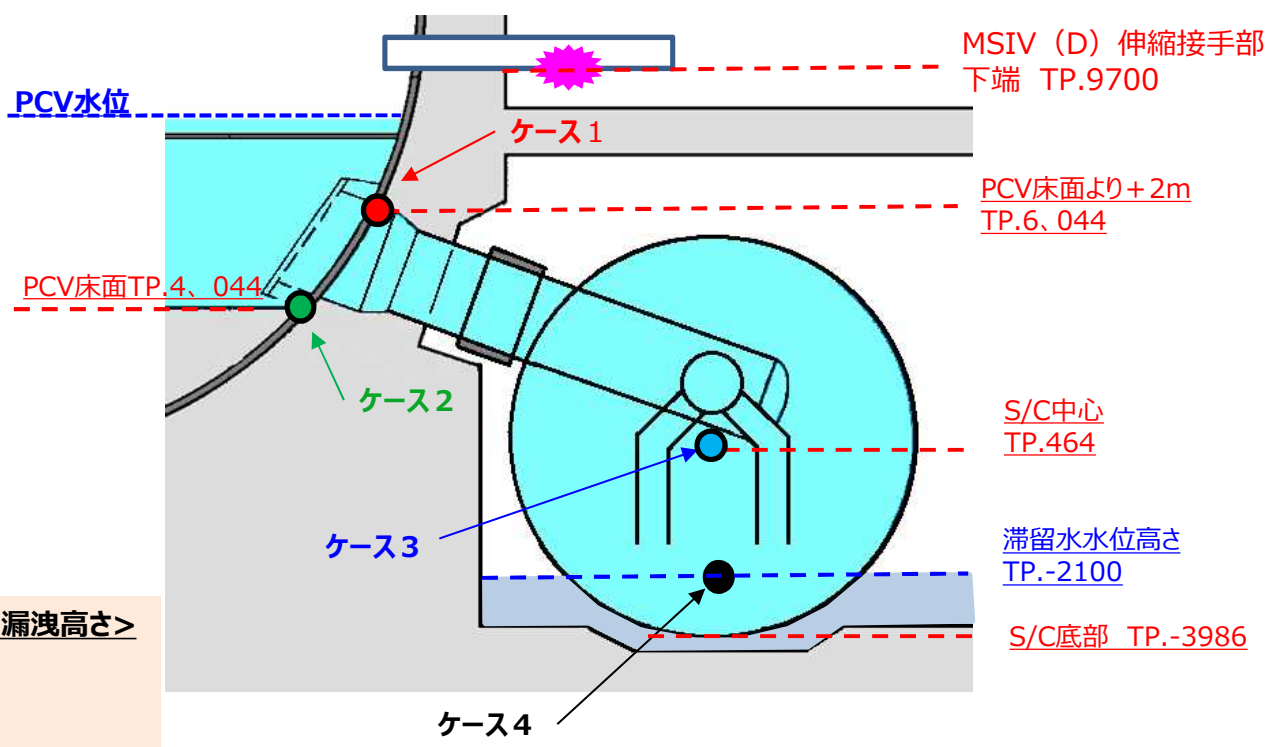
3号機については、至近の注水停止試験（2022年6月～7月）の実績トレンドから、不明箇所の漏洩高さを設定し、漏洩面積を評価した。

- ・各漏洩高さにおいて、実際のPCV水位（計算値+400mm（実績より補正））を概ね再現するような漏洩面積を推定
- ・PCV水位は、調査で漏洩が確認されているMSIV室の高さより低い水位の評価となる。

計算式

$$S = \frac{V}{\sqrt{2g(H-h)}}$$

S : 漏洩面積 (m²)
 V : 漏洩量 (m³/s)
 H : PCV水位 (m)
 h : 漏洩高さ (m)
 g : 重力加速度 (9.8m/s²)
 ※流体抵抗等は考慮せず



- <仮設定したPCVまたはS/C（不明箇所）の漏洩高さ>**
- 以下の4ケースを設定
- ケース1 PCV床面より+2m
 - ケース2 PCV床面
 - ケース3 サプレッションプール中心
 - ケース4 滞留水水位高さ

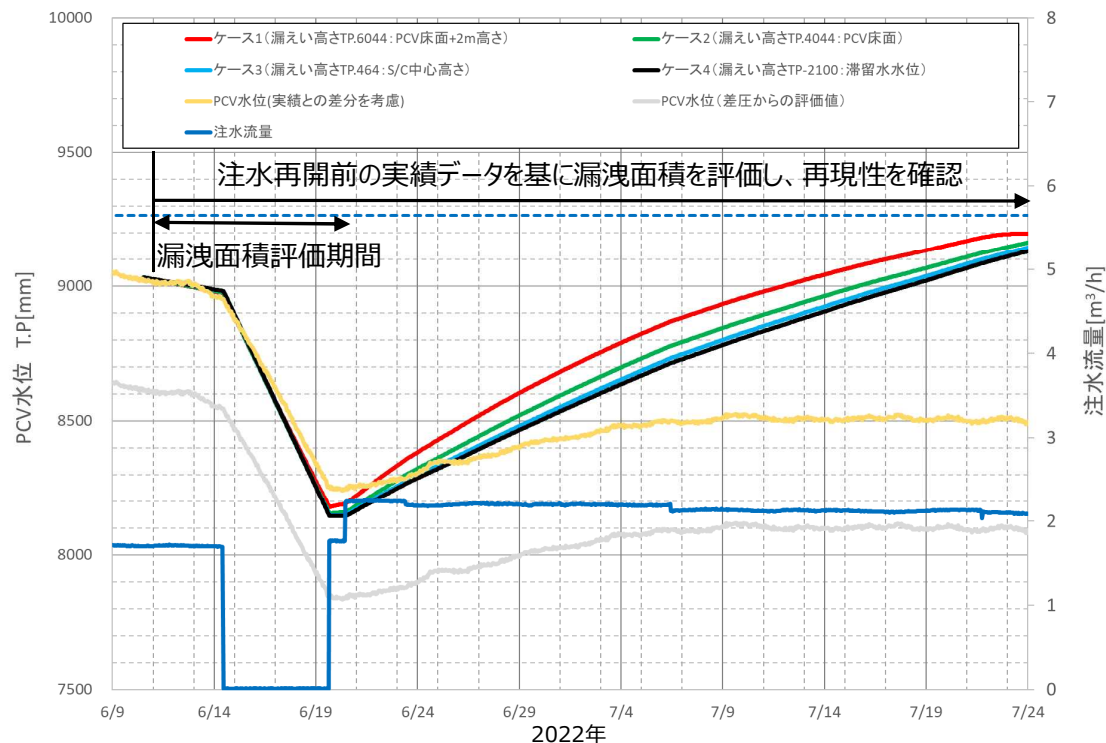
- ★ 既に調査で確認されている漏洩高さ
- PCVまたはS/C（不明箇所）の漏洩高さの設定（4ケース）

PCVまたはS/C（不明箇所）の漏洩面積の評価①

注水停止試験における注水再開前の実績データに基づく評価



- 注水再開前の実績データを基に、仮定したPCVまたはS/C（不明箇所）の漏洩面積をそれぞれ評価し、再現性を確認



ケース	仮定	調整
	不明箇所 漏洩高さ	不明箇所 漏洩面積
1	PCV床面より+2m (TP.6044)	0.69cm ²
2	PCV床面 (TP. 4044)	0.53cm ²
3	S/C中心 (TP.464)	0.40cm ²
4	滞留水水位 (TP. -2100)	0.35cm ²

<考察>

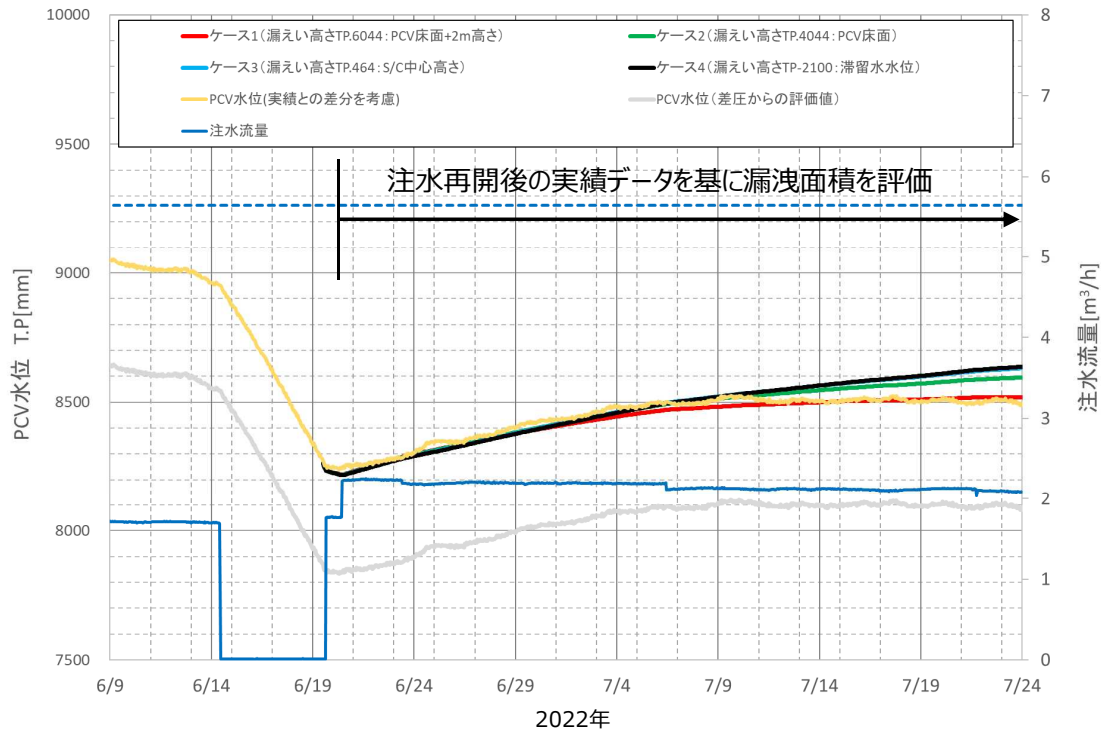
- 注水停止中にはある程度、実績に近くなるが、注水再開後の実績データとは差が生じた。

PCVまたはS/C（不明箇所）の漏洩面積の評価②

注水停止試験における注水再開後の実績データに基づく推定



- 注水再開後の実績データを基に、PCVまたはS/C（不明箇所）の漏洩面積を評価



ケース	不明箇所漏洩高さ	不明箇所漏洩面積
1	PCV床面より+2m (TP.6044)	0.85cm ²
2	PCV床面 (TP. 4044)	0.61cm ²
3	S/C中心 (TP.464)	0.45cm ²
4	滞留水水位 (TP. -2100)	0.39cm ²

<考察>

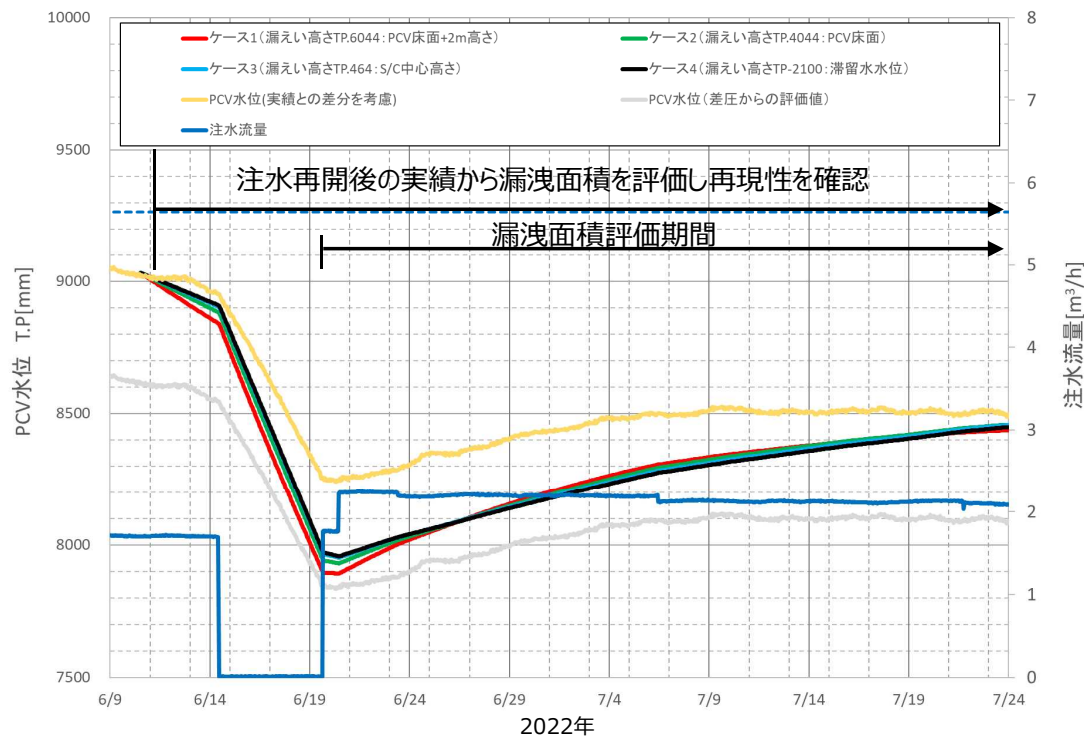
- 注水再開後の実績トレンドを基に、評価した結果、**ケース1**が実績に近い挙動となった。

PCVまたはS/C（不明箇所）の漏洩面積の評価③

注水停止試験における注水再開後の実績データに基づく再現性確認



- 注水再開後の実績データを再現するように設定した漏洩面積を用いて、注水停止前から再現性を確認



ケース	不明箇所漏洩高さ	不明箇所漏洩面積
1	PCV床面より+2m (TP.6044)	0.85cm ²
2	PCV床面 (TP. 4044)	0.61cm ²
3	S/C中心 (TP.464)	0.45cm ²
4	滞留水水位 (TP. -2100)	0.39cm ²

<考察>

- 4 ケースともに、注水停止前、注水停止期間中の低下の傾きが大きくなり、実績トレンドとの差が大きくなった。
- 漏洩高さによる再現性に大きな差はなかった。

- 今回の仮定による評価では、注水停止前～注水停止中～注水再開後を通して実績トレンドを再現する結果は得られなかった。
- また、仮設定した漏洩高さについて、それぞれ、漏洩面積を評価した結果、実績トレンドの再現性に有意な差が無く、漏洩高さの推定につながるような結果が得られなかった。

仮定した漏洩高さ毎の漏洩面積の評価結果
 （それぞれ1箇所漏洩を想定した場合の漏洩面積）

	注水再開前の 実績データに基づく評価	注水再開後の 実績データに基づく評価
PCV床面より+2m (TP.6044)	0.69cm ²	0.85cm ²
PCV床面 (TP. 4044)	0.53cm ²	0.61cm ²
S/C中心 TP.464	0.40cm ²	0.45cm ²
滞留水水位 (TP. -2100)	0.35cm ²	0.39cm ²

【今後の対応】

- 新設水位計設置以降に計画しているPCV水位の低下の中で、PCV水位の挙動を確認し、漏洩箇所の特定向けた評価を継続して行く。

(参考) 3号機PCV水位低下の取り組み

